

発行所 日本キリスト教団 なか伝道所  
〒231-0026 横浜市中区寿町 3-10-13 金岡ビル 203  
Tel. (045) 671-1109  
振替 00200 - 1 - 47369 E-Mail: naka-ch@hb.tp1.jp  
http://w01.tp1.jp/~ja6694550  
発行者 堀江有里 (題字 松橋 順)

## 宣教方針

- ① 貧しい人々への福音に共にあずかる。
- ② 地域の問題に関わる。
- ③ 諸教会に呼びかけてゆく。

集会 主日礼拝 日曜日 午前10時30分より

## なか伝の歴史を知る / 夏のキャンプ報告



なか伝道所が「中村橋伝道所」として歩み始めてから今年で30年になります。この八月に上郷森の家で開催されたなか伝キャンプでは、「なか伝の歴史を知る」のテーマで四人のメンバーがそれぞれの立場から体験談を話して学びの時を持ちました。今回はその中から三人の方の概要を紹介します。

### ■二年前前の炊き出し

横障子亜矢子

一二年前の炊き出しについてお話したいと思います。

- ・朝五時から具材の切り込みとお米の仕込みが始まっていました。
- ・お米二人と切込み二人で、四人での準備でした。
- ・六時、七時と時間が過ぎると、少しずつ人も増えてきます。
- ・八時になると、公園は切り込みのボランティアさんでいっぱいになります。
- ・一〇時に切り込みが終わり、次は雑炊作りの人たちが仕上げをします。
- ・一三時に配膳をします。

・私はうつわを渡す係りだったので、一番先でした。「こんにちは。どうぞ!」と毎週会場で、うつわとおしを渡す間に少し話をするようになってきました。その笑顔に会いたくて毎週行っていました。その時に作った詩を紹介いたします。

『あなたの顔はどんな時に

ニコツとなるのでしょうか

今日はどんな味の

雑炊だろうと考えた時に

ニコツとなるのでしょうか

今日は食事が

食べられないと思った時に

ニコツとなるのでしょうか

ありがとうの言葉を

言ってほしいのでなく

あなたの笑顔に会いたい

来週もあなたの笑顔を

お待ちしております

あなたの笑顔に会いたくて

あなたの笑顔に会いたくて』

### ■炊き出しに参加して

岩岡千恵子

現在の寿公園での炊き出しの状況についてお話します。

昔から住んでいる方々から聞くと、町は整備されたものの昔の活気はなく、人も減っているようです。が、炊き出し献立の雑炊は、ただお腹を満たしてくれるだけでなく、のどに詰まらないように食べ易く切り、多種の野菜を入れ、味付けもしょうゆ、塩、味噌、カレーなど、日ごとにローテーションさせ、果物、漬物なども加えて、見えない点で栄養面をきめ細かく考えています。そして、皆が自然に仕事を分担して黙々と作ります。おいしい匂いがしてきました。人々が集まってきて交流の場になります。

私は四年目になり、(当初は怖い、汚い、臭いの印象でしたが)逆に寿の方々に助けられ、不思議に溶け込み『みな一緒に、仲間なんだ!』と、今では私の心の居場所。よき交流となり、日常わすれかけていた大切なことを思い出させてくれます。時には列の中に神様、イエス様が一緒に並んでくれているのではないかと・・・!

こんな私でもわずかな時間ですがお手伝いでき嬉しいです。

そしてもう一つ、寿に来るきっかけになったのは、マタイ二五の三五〜四〇(原題)愛あるところに神もある、『靴屋のマルチン』トルストイ作なのです。この言葉に支えられて、これからも寿の方たちと共に

に歩み続けたいです。

### ■これからのこと 渡辺幸子

一九八七年四月五日、フィリピン留学から帰国したエイシユンさんの自宅で行われた家庭集會が、なか伝道所の前身である「中村橋伝道所」の始まりでした。人数は一〇人ほどで、最初に行われた（聖餐式）のジュースを台所にあつた湯呑で飲んだことが今でも忘れられません。本当に何もないところからのスタートでした。

それから九年後の一九九六年に伝道所は寿町に移ります。この間、私たちはその時々自分のために必要なことをプログラムに取り込みながら伝道所を作ってきました。

子ども関係では、最初、子どもを見るのはその親でしたが、やがて保育担当者による保育が始まります。そして子どもたちの居場所をどのように確保するかを話し合

い、礼拝の中に「こどもと共に」の時間を設けて大人と子どもが一緒にする礼拝を実現しました。また二〇〇八年に母親たちが親子キャンプを行ったことが教会全体で取り組む「なか伝キャンプ」へと繋がりが、ここでも子ども用のプログラムが用意されます。伝道所では子どもが大切にされてきました。

礼拝の内容については、牧師からの一方的な上から目線での説教を改善しようと質問の時間を設け、「説教」を「使信」に変更しました。また神を男性名詞の父ではなく親と言ひ換える独自の「イエスの祈り」を使用。天にいる神をイメージする「頌栄」をやめて「平和のあいさつ」や「感謝さび

ら」を取り入れるなど、権威主義的なものを排除して自分たちらしい教会を求めてきたはずでした。

けれど時間が経過する中で、新しい形の伝道所を作ろうと思っていた当初の気持ちをいつの間にか忘れてしまっていたのかも知れません。私たちの取り入れたものは習慣化されて、空気のようになりました。毎週、当たり前のよう繰り返されているので、自分たちにとって本当に必要なか意識しないで習慣的に行われているように思えます。だとしたら、たとえば「礼拝順序」の内容や「愛餐式」などの儀式、また委員会などの組織について、身近なところでは夏のキャンプやクリスマスなどの行事関係について等々・・・自分たちがやっている内容をもう一度検討してみることが必要じゃないかと思っています。

新しく牧師として就任された有里さんは「なか伝の伝統ですから・・・」という言葉の時々使われます。私としては、「なか伝に伝統なんかはないよ！」と言いたいのですが、いつのまにか「沢山の伝統」を身に付けてしまったのでは？とも思うこのごろです。

伝道所の歴史を学ぶのは過去の時代を懐かしく振り返るためではなく、これからのことを考えるためです。現状維持が大事でないことは言うまでもないので、これからどういふ伝道所を作っていくのか、みんな考えていきたいと思えます。きつと、そこに新しいなか伝が生まれるでしょう。

### ■なか伝道所の歴史（20周年誌年表より）

一九八七	四	五	渡辺牧師自宅で最初の礼拝		
一九八七	四	一	中村橋4丁目の借家に		
一九八七	六	二	通信「中村橋から」発行		
一九八七	八		通信2号に宣教方針を掲載		
一九八七	一	二	五	伝道所設立承認される	
一九八八	一	九	中村橋伝道所開設式		
一九八八	一	一	三	説教後に質問の時間	
一九九〇	九	二	町内の二階家に引っ越し		
一九九二	一	一	九	週報に宣教方針を掲載	
一九九二	六	二	一	「イエスの祈り」週報に	
一九九三	一	二	一	九	クリスマスバノラマを使った
一九九四	五	一		クリスマス礼拝はじまる	
一九九四	九	四		「子どもと共に」を設ける	
一九九四	一〇	二		「イエスの祈り」使う	
一九九五	九	三		礼拝中に保育当番を置く	
一九九六	二	四		総会で寿への移転を決定	
一九九六	二	一		名称を「なか伝道所」に	
一九九六	二	二		寿町で最初の礼拝を行う	
一九九六	四	二		「寿に学ぶ」学習会開始	
一九九六	五	二		福祉作業所の昼食ボラ	
一九九六	六	二		「ことぶき『なかだより』」に	
一九九六	八	二	九	寿老人クラブの昼食ボラ	
一九九六	一	二	二	三	寿で最初のクリスマス
一九九七	三	一	六		「頌栄」を「平和のあいさつ」に変更。「イエスの祈り」に手話をつける
一九九七	八	三	二		毎月1回の相談会を開始
一九九八	一	二	六		使信の前に「感謝さびら」
二〇〇七	一	二			階下の部屋を集會室とする
二〇〇七	四	一			礼拝出席の男女別統計廃止
二〇〇七	四	八			週報欄を50音別にする
二〇〇七	四	一			創立20周年記念礼拝

### 風景

9月2日午後、私は一つの用事を済ませたあと、墨田区八広の荒川河川敷に向かった。関東大震災時に虐殺された朝鮮人の遺骨を発掘する会／一般社団法人『ほうせんか』が毎年開催する、犠牲者の法要に参加する為だ。前日の都立横網町公園での追悼式への追悼文を小池都知事が取りやめ、勢いづいた右翼グループが、同じ公園で妨害としか思えない集會を開いたという経緯がある。『ほうせんか』の集いが無事開かれるよう、せめて頭数にでもなりたい、との思いだった。法要は多くの方が参加、踊りとお囃子が賑やかに鳴り響いており、やっと気持ち落ち着いた。『ほうせんか』を知ったのは、なか伝で見た一枚の集會のピラからだった。二〇一四年九月、早稲田スコットホールで西崎雅夫さんのお話を聴き、虐殺に関する証言の聞きとりを丹念に進めてきたグループの存在を知った。その集會に、なか伝に通う在日のUさんもいらしていたのだった。その後二〇一六年十一月三日に、荒川河川敷のフィールドワークを企画、Uさんを含む十三名で『ほうせんか』が守る追悼碑に花をたむけた。

私は東京の多摩地域のはずれ、田んぼや畑に囲まれた田舎で育った。身近な年長者が、朝鮮出身の方に偏見に満ちた見方をすることに「そんなこと言うのはおかしい」とは言えなかった。代わりに心の中に重たい石が沈んでいった。

今私は植物画を描き、カードにし、それを売ったお金を『ほうせんか』の基金に寄せている。Uさん達と語り、独学でハンダを学ぶ。そんな小さな事が、心の中の重しを少しずつ軽くしてくれているような気がする。（三月風）

使信

# かのじよ きねん 彼女を記念して

堀江有里

イエスがベタニアで重い皮膚病の人シモンの家において、食事の席に着いておられたとき、一人の女が、純粋で非常に高価なナルドの香油の瓶に入った石膏の壺を持って来て、それを壊し、香油をイエスの頭に注ぎかけた。そこにいた人の何人かが、憤慨して互いに言った。「なぜ、こんなに香油を無駄遣いしたのか。この香油は三百デナリオン以上に売って、貧しい人々に施すことができたのに。」そして、彼女を厳しくとがめた。イエスは言われた。「するま

まにさせておきなさい。なぜ、この人を困らせるのか。わたしに良いことをしてくれただだ。貧しい人々はいつもあなたがたと一緒にいるから、したいときに良いことをしてやれる。しかし、わたしはいつも一緒にいるわけではない。この人はできるところまで注ぎ、つまり、前もってわたしの体に香油を注ぎ、埋

葬の準備をしてくれた。はつきり言っておく。世界中どこでも、福音が宣べ伝えられる所では、この人のしたことも記念として語り伝えられるだろう。」

(マルコによる福音書

一四章三〜九節)

## ■ 闖入者到来？

マルコ福音書の「受難物語」、つまり、イエスが十字架へと向かう時間軸の出来事に名もない女性が登場します。イエスがシモンの家で食事をしていたときのこと。女性はどこからやってきたのかわかりません。わたしたちに伝え

られているのは、唐突に思えるこの女性の行動と、そして周囲にいた人びとの反応です。

この女性は、持っていた高価な香油の壺を割り、それをイエスの頭に注ぎました。周囲の人びとは「男たちはびつくり仰天です。いや、ただ驚いただけではなく、憤慨します。こんなに高価なものを無駄にするなんて！もつと有意義に使うべきなのに！香油を売ったら、食べるものもろくにない人たちと分かち合うことだって、できるのに！ あーあ..。」

## ■ 怒れる男たち

わたしたち、聖書の読み手はその続きを知っているので、予定調和的に解釈してしまう傾向にあります。実際、このような状況が目前に繰り広げられたら、どんな気持ちになるのでしょうか。周囲の男たちと同様、憤慨するのではないのでしょうか。少なくとも、共同体から排除され、経済的にも社会的にも（古代に「社会」というモ

ノの考え方はないですが、まあともかく）周縁に置かれた人たちと歩んだイエスの姿を知るわたしたちは、やはり、貴重な資源は有効に使わべきだ、と思っ てしまう。それが「理性的」で「正しい」 選択であるはずだ、と。べき・はず、 の正義論です。

それにしても、怒りすぎではない でしょうか。この男たち。新共同訳 で「憤慨した」とされる単語を、田川 建三さんは「きつく叱った」「叱り飛 ばした」と訳します。自分たちのあい だで怒りを共有しただけではなく、あ きらかにこの女性に攻撃が向けられて いるのです。

新約学者の山口里子さんは、女性に よる油注ぎの物語が「正典」内の四福 音書に共通して再録されていることに 触れています。「女性への行為への男 の反対は、神の国運動のごく早い時期 から女性と男性の間に何らかの緊張が あったことを示唆していると思われま す」と（山口里子『マルタとマリヤ』、と イエスの世界の女性たち』新教 出版社、二〇〇四年、二四九頁）。

だとしたら、読みもすこし変わって きます。視点は、唐突な女性の行動か ら、過剰に怒りを差し向ける男性たち へ。そうです。ひとりの女性と複数の 男性たち！ここには性別だけではな く、人数のちがひもある。このシーン が描き出しているのは二重の権力構造

（テレビで最近よく見かけるタレントを指差しながら）  
友「ねえ、この人ばかりテレビに出て、あーさー」

## なーとねえ

（近頃、すごく嫉妬深い 友8歳）



です。男たちには囲まれて、攻撃的な怒りを差し向けられる光景を想像すると、女性として生きてきたわたしはとつともない恐怖を感じざるをえないのです。

### ■物語の主人公への転換

さて、イエスはこの女性の行為を歓迎します。それが埋葬の準備である、と周囲の男性たちに告げながら。ここで示されているのは、この名もなき女性に、イエス自身が視線を注いでいるという事実。その群れから追い払われようとしていた彼女をイエスは中心に置くわけです。

わたしたちはそもそもイエスを中心に物語を解釈しようとするので、おのずと主人公は決まっています。しかし、その視点をずらす言葉が語られているのではないのでしょうか。「世界中どこ

でも、福音が宣べ伝えられる所では、この人のしたことも記念として語り伝えられるだろう」(九節)。

### ■記念すること、継承すること

「彼女を記念して」——これはエリザベス・シユスラー・フィオレンツァの代表作のタイトルです。山口里子さんの翻訳で日本にも紹介された『彼女を記念して——フェミニスト神学によるキリスト教起源の再構築』(日本基督教団出版局、一九九〇年)です。

強い結びつきがある共同体に入り込み、歓迎されないことをやってのけるのはとても勇気のいることです。たったひとりでその場に立たなければならぬ孤独。攻撃を受ける危険。その瞬間だけではなく、当然、その後もつづくであろう困難に向き合わなければな

らないのです。この物語はどのように派生していったのでしょうか。先に引用した山口里子さんは、こう述べています。

もしも歴史上のイエスが、女性の果敢な行動を支持するそのような言葉を男性たちの反対の前で言ったのであれば、女性たちは当然、そのような言葉を決して忘れないでしょうし、その言葉を堅持して勇気と支持の源にしたでしょう。

(山口里子、前掲書、二五一—二五二頁)

イエスがその歩みのなかで、その場で大切な人を中心に据え、周囲の人びとに注意を促していることを思い起こしてみたいものです。

いつの間にか、自分が神に選ばれた聖なる者で、いつも正義の側に立っているという思い込みを、わたしたちはつくってしまっています。イエスの周囲にいた男たちが、「べき・はず」の正義論を振りかざして、ひとりの女性を攻撃したように。

この物語はわたしたちに「思い込みを外すこと」を示しているのではないのか。わたしはそう受け取ります。周囲を見なさい。そこに忘れ去ってしまったものはないか。そんな問いかけ

## まど

▼なか伝道所は三〇周年。みなさまのお支えに心より感謝申し上げます。一〇月二二日には、午前二時から午後二時からの記念礼拝、午後二時から感謝茶話会を開催します。教区内諸教会・伝道所のほか、支援会の近隣のみなさまには渡辺英俊牧師と相談し、ご案内をお送りしました。お越しいただければ幸いです。

▼何通かお便りをいただいでいて反省中です。通信からは現状がわかりにくいようです。主任牧師は春から石倉夕子牧師

(堀江有里)

## 編集後記

今年、なか伝は開設三〇周年を迎えます。一〇月二二日の記念会に合せた「記念誌」発行準備や打ち合わせなどでバタバタ状態に。でも、その中のメンバーとのやり取りが楽しく素敵な時間です。(幸子)